

### 「大きな努力で、小さな成果を」

教育研究所主任指導主事兼 ICT教育推進係長  
三 村 悟

「俺も悩んでいるんだ。一緒に勉強しないか？」

この一言のお陰で、今がある。

採用2年目の秋、自分の授業の下手さ加減を自覚するようになるにつれ「自分には教師を続けていく資格がないのでは」と、自信を失いかけていた。藁にもすがる思いで参加した授業研究会。その会場で久しぶりに出会った同期の仲間がかけてくれた言葉がこの一言だ。

月に1度、土曜日の午後には先輩や仲間と授業づくりを学んだ。学び、実践するうちに、確実に子どもの反応が変わってきたのが分かった。それがうれしくて、夜遅くまで夢中になって学んだことを今も思い出す。

「生き生きと学ぶ」の前に来る言葉は何かと問われれば、「子どもが」と答えるのが正解であろう。しかし、教師自身が授業づくりについて「生き生きと学ぶ」ことがなければ、子どもが「生き生きと学ぶ授業」は生まれない。まずは、教師が授業づくりを学びたい。

先輩から授業づくりについて学ぶのは勿論だが、新しい技術や発想は後輩から学ぶことも多い。

授業づくりは苦勞も多い。何時間、何十時間をかけてようやく1時間の授業の準備ができることもある。だが、その苦勞の先には、必ず子どもの生き生きとした顔が待っている。何と報われる苦勞ではないか。

この苦勞を乗り越えるパワーは「想像力」である。今、ここで自分の費やす時間と努力が子どもに届く様子を具体的にイメージすることができれば、その苦勞は精進へと変わる。

「凡事徹底」の言葉と掃除の実践で知られる鍵山秀三郎氏は、講演のテーマのひとつとして「大きな努力で、小さな成果を」を使われる。「逆ではないんですか？」という質問に対して、「『小さな努力で大きな成果』を得る生き方よりも『大きな努力で、小さな成果』を得る生き方のほうが、より確実で、自信になり満足が得られるのだ」と、答えておられる。

さいたま市学校教育ビジョンでは、「知」「徳」「体」「コミュニケーション」のバランスのとれた子どもをはぐくむことを基本理念としている。その実現のためには日々の授業の充実こそが大切である。「子どもが生き生きと学ぶ授業づくり」を確実なものとしていくためには、功を焦らず「大きな努力」で手にした「小さな成果」をともに喜んでくれる先輩や仲間感謝していくことなのだと嘯みしめる今日この頃である。